様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　3 月　31 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21320071

研究課題名（和文）　宋代総集の流伝と文学史的意義に関する実証的研究

研究課題名（英文）　Research regarding the Circulation of Song Dynasty Anthologies and the Significance in the History of Literature

研究代表者
野村　鮎子（　NOMURA　AYUKO　）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：60288660

研究成果の概要（和文）：本邦には、これまで宋代総集に関する体系的な研究はなかった。宋代文学に関する研究のほとんどは、詩人とその別集（個人の詩文集）についての研究であり、宋代総集の意義は看過されてきたといっても過言ではない。本研究は、『四庫提要』の３４種の総集についての解読と国内外の善本所蔵機関への調査を中心としたものである。その成果は『四庫提要宋代總集研究』（汲古書院　2013 年１月）として公開した。

研究成果の概要（英文）：Previously, in Japan there has been no comprehensive research on anthologies of the Song Dynasty.　Most Japanese research on the Song Dynasty literature has focused on poets and personal anthologies, and thus, it is fair to say that Japanese researchers has so far overlooked the significance of Song Dynasty anthologies. The research primarily analyzes 34 anthologies of Song Dynasty in the *Sikutiyao*, as well as surveying valuable texts held at both domestic and foreign institutions. The findings were published as *The Studies of Anthologies of the Song Dynasty in Sikutiyao*-(Kyuko Syoin, Jan. 2013).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,700,000	510,000	2,210,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	4,800,000	1,440,000	6,240,000

研究分野：中国文学
科研費の分科・細目：文学　　各国文学・文学論
キーワード：四庫提要、宋代文学、総集、版本

１．研究開始当初の背景

（１）宋代文学研究で総集が占める位置

中国古典の文集は、文学者個人の詩文を集めた「別集」と、時代や地域、詩体や文体など特定のテーマによって編纂された「総集（アンソロジー）」との二つに大別できる。宋代は学問文芸への関心の高まり、あるいは印刷業の発展を背景として、おびただしい数の総集が編纂出版された時代である。現在に伝わっている本も多い。しかし、従来の文学研究では、総集はせいぜいのところ宋代の詩派や文派の研究資料の一

つとして扱われるに過ぎず、文学研究では脇役的な存在であったことは否めない。そのため、宋代総集は文献学的な研究もほとんど進んでいない。また、既存の宋代文学史でも総集編纂の意義について言及したものは少ない。

（２）先行研究の問題点

近年の中国では、四川大学古籍整理研究所編『現存宋人版本目録』（巴蜀書社 1989）、劉琳・沈治宏編著『現存宋人著述総録』（巴蜀書社 1995）、曽棗荘主編『中華大典 文学典　宋遼金元文学分典』（江蘇古籍出版社 1999）、陳楽素著『宋史芸文志考証』（広東人民出版社 2002）、祝尚書著『宋人別集叙録』(中華書局 1999)、『中華大典』といった宋人文集の工具書が陸続と出版されたほか、祝尚書著『宋人総集叙録』（中華書局 2004）のような宋代総集についての専門書も登場し、宋代総集の版本研究は初期段階をすでに脱したといってよい。

ただし、これら中国での基礎研究には、日本や台湾に蔵される版本を確認していないという重大な遺漏がある。たとえば日本の静嘉堂文庫蔵本については、引用の序跋はすべて『皕宋楼蔵書志』からの転載であるため、文字に誤りが見られる。厳紹璗編撰『日本蔵宋人文集善本鉤沈』(杭州大学出版社 1996)や同『日蔵漢籍善本書録』(中華書局 2007)は、日本に蔵される本を網羅的に著録したものだが、該書には所蔵機関の目録によってのみ整理したと見られる箇所も多い。また、『中華大典』は、紀事・著録などの項目別に研究資料を蒐めており、そこには版本の流伝を研究するうえで重要な序跋の類も多く収載されているが、序跋の出典、つまりどの版本から採られたものなのかについてはほとんど明示されておらず、必ずしも全篇が載録されているわけではなく、節略箇所も多い。また、各種版本に冠された序文の類は楷書以外の書体で刻されることもあり、活字におこす際に字を誤ったと判断されるものもあり、問題が多い。

２．研究の目的

本研究は、宋代の文学者が編纂した宋代詩文の総集についてその文学史的意義を明らかにすることを目的としている。

『隋書』経籍志によれば、総集とは「文集の総鈔」すなわち大部な文集から選りすぐったものである。『四庫全書総目提要』総集序は、総集の役割を「繁蕪を刪汰」して「菁華をして畢く出だし」(余分なものを削って精華を抜粋し)、「放佚を網羅（散佚から詩文を救う)」ことだとする。詩文を選りすぐること、そして詩文の散佚を未然に防ぐこと、この二つの役割がはじめて揃うのが、宋代総集だと言えよう。

宋代の詩派の名が、その文学的立場を鮮明にした総集の書名に因んだものであることはよく知られている。たとえば、北宋初めの艶麗な文辞で知られる西崑派は『西崑酬唱集』という総集に因むものであり、江西派は『江西宗派図』によって、江湖派は『江湖集』によってその名称を得た。また、宋代には文学者の観点のみならず、理学者の立場から詩文を編纂した総集もあり、真徳秀編『文章正宗』や何無適・倪希程の編と伝えられる『詩準』などがこれにあたる。

さらに、宋代の総集に特徴的ともいえるのが、編集テーマの多様化である。『会稽掇英総集』『天台集』『赤城集』『成都文類』などのように詩派や文派にかかわらず特定の地域をテーマとしたものや、『同文館唱和詩』『坡門酬唱集』のように文人の唱和詩を集めたもの、『古今歳時雑咏』や『声画集』のよ

うに詩の主題によって編纂したもの、『月泉吟社』のように詩のコンテストの入賞作を集めたものなど、多くのバリエーションが存在する。総集は、当時の人々や特定の詩派がどのような作品を精華と考えていたかという文学観を反映しており、宋人によるバラエティに富む総集の編纂は、文学観の多元化を意味していよう。宋代総集の研究は、その編纂者の宋の文学的志向や時代特有の文学観を考察することにつながるものである。

３．研究の方法

本研究では、『提要』中の宋代総集について詳細な注釈を施すことを通じて、宋代総集の版本および宋代の文学思潮についての『四庫提要』の誤りも弁証する。

具体的には三段階の作業から成る。第一段階は『四庫全書総目提要』宋代総集の部の提要と存目提要の解読である。第二段階は『四庫全書総目提要』に著録されていない総集についての佚存調査、第三段階は国内外の善本所蔵機関への版本調査である。

申請者（野村鮎子）は、かつて今回の研究連携者（筧 文生）とともに科研費研究 H10－11　基盤研究（C）「四庫全書宋人文集提要に関する実証的研究」、H15－17　基盤研究（B）「四庫提要にみる南宋詩文集の流伝と文学評価に関する実証的研究」を進めた際に、訳注原案作成と版本調査を担当した。筧は研究会に参加し、原案を検討、さらに版本調査にも立ち会った。この役割は本研究においてもそのまま継承された。

版本調査では、以下の国内外の研究機関ならびに図書館の所蔵する版本について調査を行った。

・京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター
・東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター
・国立公文書館内閣文庫
・宮内庁書陵部
・国会図書館（東京、関西）
・東洋文庫
・静嘉堂文庫
・前田育徳会尊経閣文庫
・お茶の水図書館
・名古屋市立蓬左文庫
・中国国家図書館（中国北京）
・北京大学図書館（中国）
・上海図書館（中国）
・南京図書館（中国）
・復旦大学図書館（中国）
・国家図書館（台湾）
・故宮博物院図書文献館（台湾）

４．研究成果

（１）宋代総集の分類について

現在、『四庫全書総目提要』に著録される総集は、165 種、9,947 巻に及ぶ。その大半は、明代以降の書であるが、ここに宋代総集が 34 種含まれている。これを編纂テーマによっておおまかに分類してみると、次のようになる。

①唱和詩集…『西崑酬唱集』、『同文館唱和詩』、『坡門酬唱集』、『南岳倡酬集』。
②一族の合編文集…『清江三孔集』、『三劉家集』、『二程文集・附録』、『柴氏四隠集』。
③地方文献の薈萃…『会稽掇英総集』、『厳陵集』、『成都文類』、『天台前集・前集別編・続集・続集別編』、『赤城集』、『呉都文粋』。
④文粋・詩選
　詩文選……『宋文選』、『宋文鑑』、『五百家播芳大全文粋』、『蘇門六君子文粋』、『詩家鼎臠』。
　評　選……『古文関鍵』、『崇古文訣』、『文章正宗・続集』、『妙絶古今』、『古文集成前集』、『文章軌範』。

模範解答集……『論学繩尺』、『十先生奥論』。

⑤主題による詩選…『古今歳時雑咏』、『声画集』、『回文類聚』。

⑥詩社の吟詠評選…『月泉吟社』。

⑦詩人小集の合編…『江湖小集』、『両宋名賢小集』、『江湖後集』。

上のうち、①の「唱和詩集」、②の「一族の合編文集」（家集）は前代から継承された編纂方式といえる。しかし、その他については、宋以降に顕在化した新しい総集の形ともいえるものである。③の地方文献の薈萃とは、特定の地域や名所をテーマとした詩文を輯めた文集を指す。これらは、地方官として赴任してきた文人によって企画されたものと、その土地の出身者による編輯の場合とがある。④の文粋・詩選は、おおまかに詩文選、評選、模範解答集の三種に分けられる。特に宋に登場したのが、評選の中の評註本あるいは批点本とよばれるもので、編者の批評が夾注（割注）や圏点（右横の丸点や傍点）、抹（傍線）、鉤（カギ括弧）といった評点符号とともに示されている（ただし、四庫全書本は、注を除いてこれらの評点符号はすべて削除されている）。評点符号をともなう評選本は、儒者による講述という形から発展したものである。こうした評選本、特に古文評注の総集が宋代に多く登場した理由には、講学の流行のほかに科挙の受験対策という側面があったことも見逃せない。

（２）『四庫提要』宋代総集の部の失考

『四庫提要』の内容に事実誤認や遺漏が多いことは、すでに余嘉錫『四庫提要弁証』（中華書局 1980）・欒貴明『四庫輯本別集拾遺』（中華書局 1983）・李裕民『四庫提要訂誤』（書目文献出版社 1990、増訂本は中華書局 2005）・崔富章『四庫提要補正』（杭州大学出版社 1990）などが指摘している。今は個々の細かい訂誤は省略し、ここでは『四庫提要』宋代総集の部の重大な失考を挙げておく。

第一に、『四庫提要』が宋代総集として著録する書のうち、『呉都文粋』・『同文館唱和詩』・『南岳倡酬集』の三書は宋人の編纂にみせかけた偽託の書である。

第二に、『同文館唱和詩』と『南岳倡酬集』であるが、この二書も明清時代に、宋人の別集から抄出して作られた偽書である。

第三に、四庫全書編纂官が故意に点抹や傍註のない版本を選択して著録していることである。

たとえば、『古文関鍵』は北宋の名家の古文 62 篇を集めた選集であるが、評点という形の文学批評を採用し、後世の古文選集に大きな影響を与えたことで知られる。呂祖謙の原編である二巻本のほかに増註本の二十巻が現存する。ただし、２本の編録文は同じである。『四庫提要』は、『宋史』芸文志が二十巻本に作るのを誤記とみなし、二巻本を著録するが、点抹や傍註を省略した明の嘉靖刻本を底本としているため、四庫全書本『古文関鍵』には評点がない。つまり四庫全書本『古文関鍵』は、呂祖謙の文学批評を研究する上では役に立たないものとなっている。四庫全書が、鉤抹のない版本を採用したのは、四庫全書編纂官に「点抹や旁註のある本＝俗書」という偏見があったためであろう。

このほか、『崇古文訣』・『文章正宗・続集』・『妙絶古今』・『古文集成前集』・『文章軌範』・『十先生奥論』についても、本来、世に通行していたのは点抹や傍註のある版本だったのだが、四庫全書本の場合、語注や批評以外の圏点、抹、鉤といった評点符号はすべて割愛されている。特に、『十先生奥論』については、四庫全書本以外に伝本は失われている

ため、評点の原姿を他本で確かめる術もない。

この評点符号を用いた評選は、宋代総集の特徴の一つといえるのだが、四庫全書の編纂によってこの特徴はわかりにくいものとなってしまった。これは四庫全書の宋代総集の最大の問題である。

（３）四庫全書宋代総集研究の問題点と課題

『四庫全書』宋代総集研究の問題点と課題を述べておく。

まず、永楽大典本の書名についての問題である。四庫全書が宋代総集の一つとして著録する『江湖後集』二十四巻は、『永楽大典』からの輯本本である。紛らわしい書名であるが、四庫全書本の『江湖後集』は、四庫全書本『江湖小集』に対しての謂いであって、南宋に臨安の書坊によって刊行されていた『江湖集・後集・続集』といったシリーズ中の『江湖後集』ではない。

次に、永楽大典本には輯佚の際の漏輯が多いという問題である。費君清「《永楽大典》中発現的江湖集資料論析」（『杭州大学学報』第 18 巻第１期 1988）によれば、今、『永楽大典』残巻中の「江湖」の名を冠する詩集は、『江湖前賢小集』・『江湖前賢小集拾遺』・『中興江湖集』・『江湖集』・『江湖詩集』・『江湖前集』・『江湖後集』・『江湖続集』の８種で、合計 108 人の詩人、303 の詩篇が確認できるという。費氏がこれを四庫全書本の『江湖小集』や『江湖後集』と対校したところ、詩人は 36 家、詩篇にして 172 篇、詞１篇の遺漏があった。欒貴明氏は『四庫輯本別集拾遺』の序において、別集の場合、漏輯率は 28.8％であるとしており、輯佚本『江湖後集』の場合はこれより高い漏輯率ということになる。費氏は、四庫全書本『江湖後集』という不完全な資料にもとづいた江湖派研究にも警鐘を鳴らし、また、『永楽大典』に明記されていたはずの出典が『江湖後集』輯佚の際に記録さなかったことが、江湖派研究を難しくしているのだとも指摘する。

たしかに『江湖小集』や『江湖後集』のように小集合編の形をとる総集の場合、版本やその流伝形態は複雑で、四庫全書の輯佚本が出現したがために、却って混乱に拍車をかけることになってしまった側面があるのは否めない。

次に、四庫全書の宋代総集の部の蕪雑さの問題である。上述したように、四庫全書では総集の部を編纂するにあたって、「菁華畢く出さしむ」と、「放佚を網羅」するという二つの採択基準を設けた。その結果として、宋代総集の部には『論学繩尺』や『十先生奥論』といった科挙受験用模範解答集や『崇古文訣』のような古文指南書、さらに『江湖小集』のように叢書の形に近い小集合編など、雑多な宋代総集が著録されることになった。同じ総集でも明になると総量が多いぶん著録基準が厳格化し、受験参考書は徹底した俗書の扱いをうけて四庫全書に著録されることはなくなるが、宋は伝世の書物が少ないことから、優先的に著録されたのである。このため、四庫全書に著録された宋代総集は、一見すると蕪雑で冗繁なものと思われがちである。

（４）調査研究によって得た新しい知見

しかし、これは『四庫提要』が宋代総集の編纂の方針を「放佚を網羅」することに置いたがゆえの結果ともいえる。しかも、これが幸いして、書物が後世に伝わることになった例も多い。『十先生奥論』は四庫全書本の底本となった原書がすでに存在せず、四庫全書のみによって伝わる書物であり、『厳陵集』は底本とした宋刻の天一閣本が伝わらないことから、四庫全書本が原姿をとどめる唯一のものとなっている。

宋代総集の四庫全書本には版本上の問題が少なくない。しかし、それを蹈まえたうえでそこに分け入れば、冗繁と蕪雑の中から、宋代における文学のありようや書物の編纂、出版、流伝をめぐる人々の営みがわたしたちの前に立ち現われて来よう。

今回の調査の過程では、これまで失われたと考えられていた天一閣旧蔵明鈔本『声画集』(『声画集』の最も古い善本) を上海図書館で発見することができ、また、天順あるいは成化本ともいわれていた復旦大学図書館蔵の『校正重刊単篇批点 論学繩尺』が日本の蓬左文庫本と同じ嘉靖重刊本であることなど、版本の問題について、いささかの新しい知見を加えることもできた。

これらの新しい知見については、すべて『四庫提要宋代總集研究』(汲古書院 2013) の各条の【附記】に記しておいた。ただし、北京への調査を予定していた時期に、日中問題が深刻化し、一部閲覧調査がかなわなかったものもある。それについては未見としておいた。そのほかにも遺漏や誤謬は多々あろう。博雅の教えを切に乞いたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 野村鮎子、《『四庫提要』にみる宋代總集評価》、《叙説》、《査読無》、《第 39 巻》、《2012 年》、《p72－89》
http://hdl.handle.net/10935/2905

② 野村鮎子、《歸有光《先妣事略》之系譜—論弔母之古文體的生成與發展》、《中華婦女史論集》、《査読有》、《第 9 巻》、《2011 年》、《p91－110》

③ 野村鮎子、《帰有光の時務文—もうひとつの『未刻集』が語るもの》、《叙説》、《査読無》、《第 38 巻》、《2011 年》、《p315－332》
http://hdl.handle.net/10935/2858

④ 野村鮎子（権赫子訳）、《汪琬的歸有光研究及其意義》、《清代文学研究集刊》、《査読有》、《第２輯》、《2009 年》、《p309－350》

〔学会発表〕（計３件）

① 野村鮎子、《ジェンダー史と中国古典詩文研究》、《京都大学中国文学会第 27 回例会》、《2012 年７月 14 日》、《京都大学》

② 野村鮎子、《『論學繩尺』について》、《奈良女子大学 2010 年中国文学公開研究会》、《2010 年 12 月 5 日》、《奈良女子大学》

③ 野村鮎子、《歸有光の時務文—もう一つの『未刻集』が語るもの》、《2009 年度日本中国学会》、《2009 年 10 月 11 日》、《東京、文教大学》

〔図書〕（計４件）

① 野村鮎子、筧文生、《汲古書院》、《四庫提要宋代總集研究》、《2013 年》、《総 360 頁全編共著につき執筆担当ページを示していない》

② 福本雅一、矢淵孝良、村上幸造、野村鮎子（ほか７名、７番目）、《藝文書院》、《中國文人傳第五巻宋三》、《2010 年》、《総 273 頁、担当：p 210－242 李清照傳》

③ 野村鮎子、成田靜香編、《人文書院》、《台湾女性研究の挑戦》、《2010 年》、《総 368 頁、共編につき編纂については担当ページを分けず、執筆担当は P269－286「可視と不可視の間—原住民族女性の今日的課題」、翻訳担当は P249－268「部落と都会の間—台湾原住民女性の世代間における経済活動の変転」》

④ 石川照子、高橋裕子、野村鮎子（ほか 17 名、７番目）、《明石書店》、《家族と教育 ジェンダー史叢書２》、《2011 年》、《総 307 頁、担当 p 96-97 コラム「烈婦の父、貞女の兄—家父長制と家族愛のあいだ」》

６．研究組織

(1)研究代表者
野村　鮎子（NOMURA AYUKO）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：60288660

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
筧　文生（KAKEHI FUMIO）
立命館大学・文学部・名誉教授
研究者番号：60066628